

日语

古典文法入门

——美文佳作助学读本

于
鹏 刘向红 编著



南开大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语古典文法入门：美文佳作助学读本 / 于鹏，刘向红编著. —天津：南开大学出版社，2010.12

ISBN 978-7-310-03588-5

I. ①日… II. ①于… ②刘… III. ①日语—语法—古代—自学参考资料 IV. ①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 197931 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人：肖占鹏

地址：天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码：300071

营销部电话：(022)23508339 23500755

营销部传真：(022)23508542 邮购部电话：(022)23502200

*

天津泰宇印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2010 年 12 月第 1 版 2010 年 12 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 8.5 印张 210 千字

定价：15.00 元

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022)23507125

前 言

本书《日本古典文法入门——美文佳作助学读本》是为高等学校日语专业学生编写的教科书，也可供有一定日语基础的自学者及日语工作者参考使用。

对于日语学习者来说，要提高语学能力，适时学习古文知识必不可少。现代日语是从古代日语发展来的，现代日语继承了古代日语的许多词语和典故。因此，如果我们古典日语修养较高，对现代日语的阅读理解能力也就较高。另外，更重要的是学习古文知识是继承传统文化的重要途径，可以帮助我们了解一些历史知识、文学知识和社会生活知识，增强了解日本社会、认识事物的能力。

说起来日语古典文法的教科书有多种可供选择。其共同的特点是，参考多种古典文献对体言、用言、助词、助动词等语法现象进行分门别类的讲解，主要优点是系统性强。但我们在教学实践中感到，由于学时所限往往学不完一本教科书，其次讲解文法的例句都是从数种古典文献中摘录出来的只言片语，内容上没有连贯性。因此，学生普遍感觉古典文法枯燥，少有兴趣。

本书以俳圣松尾芭蕉的纪行文《奥州小路》为学习材料，力求在欣赏古典文学经典作品的同时，自然地、循序渐进地掌握古文知识。《奥州小路》语言优美，它由 50 篇独立的短文组成，是近世俳谐纪行文学的经典杰作。本书选用其中 20 余篇为课文，在对词汇、语法进行详细解说的同时，也对文中出现的历史人物、事件进行解说。实践证明，这样做有利于提高学生的学习兴趣，

为学生打下良好的古文基础。

本书的特点：

在注意自然地、循序渐进地学习古典文法的同时，也尽量照顾到知识的系统性，适时对书中出现的语法现象作总结、归纳。

为了方便学生自学，在每篇课文后面都附有现代日语译文。对课文中的难读的汉字均注有历史假名，同时在其后标注出现代日语的读音。

在语法解说上，为了便于理解，对所有文言例句都有现代日语的翻译，并译成中文，供学习者参考。

根据每课的学习内容，选编了一定数量的练习，并附有练习解答。为使学生了解近年来日语专业八级考试的古典部分的内容，书后附有 2003 年—2007 年专八考试古典部分的真题，并作了详尽的解说，以便学生自学。

本书的编写，蒙日本文教专家町田幸子先生热忱鼓励和悉心指导并审阅全稿。在编写过程中，南开大学出版社的编审张彤女士，自始至终给与多方具体指导和帮助。编者在此一并表示由衷的感谢！

由于编者水平有限，书中错误不当之处在所难免，敬请读者批评指正。

编者

2010 年 3 月

目 录

第一課 古文の基礎知識	1
第二課 漂泊の思い	16
【本文】	16
【新出単語】	17
【表現・文法】	19
【練習】	30
第三課 旅立ち	32
【本文】	32
【新出単語】	33
【表現・文法】	34
【練習】	44
第四課 草加	46
【本文】	46
【新出単語】	47
【表現・文法】	48
【練習】	56
第五課 室の八島	59
【本文】	59
【新出単語】	60
【表現・文法】	61

【練習】	66
第六課 仏五左衛門（日光山の麓）	68
【本文】	68
【新出単語】	69
【表現・文法】	70
【練習】	75
第七課 日光参詣	78
【本文】	78
【新出単語】	80
【表現・文法】	81
【練習】	87
第八課 那須野	88
【本文】	88
【新出単語】	89
【表現・文法】	90
【練習】	95
第九課 黒羽	97
【本文】	97
【新出単語】	98
【表現・文法】	100
【練習】	105
第十課 雲巖寺	106
【本文】	106

【新出単語】	107
【表現・文法】	109
【練習】	116
第十一課 殺生石、清水流るるの柳（蘆野の里）	118
殺生石	118
【本文】	118
清水流るるの柳（蘆野の里）	119
【本文】	119
【新出単語】	119
【表現・文法】	120
【練習】	128
第十二課 白川の関	130
【本文】	130
【新出単語】	131
【表現・文法】	132
【練習】	137
第十三課 須賀川	139
【本文】	139
【新出単語】	141
【表現・文法】	142
【練習】	148
第十四課 浅香の沼、しのぶの里	150
浅香の沼	150
【本文】	150

しのぶの里	151
【本文】	151
【新出単語】	151
【表現・文法】	153
【練習】	159
第十五課 飯塚	160
【本文】	160
【新出単語】	161
【表現・文法】	163
【練習】	169
第十六課 壺の碑	171
【本文】	171
【新出単語】	172
【表現・文法】	175
【練習】	179
第十七課 末の松山・塩釜の浦	181
【本文】	181
【新出単語】	182
【表現・文法】	184
【練習】	188
第十八課 塩釜の明神	190
【本文】	190
【新出単語】	191
【表現・文法】	193

【練習】	196
第十九課 松島湾 松島（その一）	197
【本文】	197
【新出単語】	198
【表現・文法】	199
【練習】	203
第二十課 平泉	205
【本文】	205
【新出単語】	207
【表現・文法】	209
【練習】	216
練習の正解	218
付録一	218
日本語専業八級試験（2003 年～2007 年）	
古典文法に関連する問題及び解答	237
付録二	237
1. 動詞活用表	249
2. 形容詞活用表	250
3. 形容動詞活用表	250
4. 助詞の意味、用法	250
5. 奈良時代特有の助詞	254
6. 助動詞活用表	254
参考文献	260

第一課 古文の基礎知識

一、なぜ古文を学ぶのか

上記の問題については、日本の国語学者である大野晋氏がある読者の質問に対して、次のように述べている。

「現代だけを見て生きていくのではなくて、ためしに、過去を振り返って見ましょう。

人間が文字を獲得したのは、何百万年の人間の歴史の全く終わりのほう、つまり現代に近接した、ごく短い時間、わずか数千年のことでもあるのがわかります。

ですから、人間は、文字などを読んだこともなく、書いたこともなく、一生を生きて終わった人々のほうが、はるかにはるかに多かったのです。

ところがこの、文字など全く知らない人々も、みな言葉によって神に祈り、恋の歌を歌い、集まっては英雄の物語を聴いて生きてきました。人間は本来的に、そうしたことを求めて生きる存在のようです。

長い長い人類の時間の経過の後で、文字を発明した人が現れました。それが正確な伝達に役立つことに気づいて、人々はそれを学び、自分たちの言葉を書く喜びと大切さを知りました。言語の才能の豊かな人がそれを使って、祈りの言葉を書き、愛する人に送る歌をしるし、また、家々の血統の証拠を記録しま

した。

人間がただ生きていだけならば、現代社会でも文字を一字も覚えなくても生きていけないことはないでしょう。しかし、あなたが文字を一字も知らないと仮定してみましょう。すると、どんなことが起るでしょうか。

あなたは新聞を読めず、漫画も読めない状態になるわけです。

英語がよく読める人ならば、英語の小説や詩を楽しむ事ができます。フランス語がよく読めればフランスの古典劇の見事さをよく理解できるでしょう。単に現代日本語が使える人間であるというだけではなく、全日本語のわかる人間、現代日本語の基礎知識となり、日本人の心の記録、物事の歴史を書きとめてきた、立派な古典日本語も分かる人間。若い人々をそこへ行かせたい。そういう考えで、古文・漢文の時間が高等学校に置かれているのだろーと思ひます。つまり、

我が宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも

うらうらに照れる春日にひばりあがり心悲しも独りし思へば

こういう自然への感覚。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。

こういう世界観。これらのもの、日本人が生み出した言語的な遺産が理解できる豊かな心の人間になるように、それらの言葉を学ぶこと。それが古文・漢文の時間なのです。……」（大野晋他『日本語相談二』より）

このように、古典に親しむことによって、祖先が何を考え、何に感じたか、どのように新しいものをとらえ、どのように言

葉を磨いて、心を豊かにしてきたかを知り、これをどう受継ぎ、どう生かして進まなければならないかを理解することである。

二、古文と現代文の主な違い

(1) 古文と現代文

古文とは、日本では、文化遺産として大切に継承されてきた言語作品のうち、主として奈良時代から江戸時代末までに書かれた、広い意味での文学としてすぐれたものをいう。

古語とは、それらの古文に用いられた言葉で、文語ともいわれる。

A. 今は昔、竹取の翁^{おきな}といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さかきの造^{みやづこ}となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。翁言ふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となりたまふべき人なめり。」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。

B. 今ではもう昔の話であるが、竹取の翁というものがいたということだ。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろなことに使っていた。(翁)の名をさかきの造といった。その竹の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思って近寄って見ると、(竹の)筒の中が光っている。それを見ると、三寸ほどである人が、たいそうかわいらしい様子で座っている。翁が言うことには、「わたしが毎朝毎夕見る竹の中にいらっしゃるので、わかった。(わたしの)子にお成りになるはずの人であるようだ。」と言って、手の中にちょいと入れて家へ持ってきた。

上のAは平安時代に書かれた『竹取物語』の書き出しであり、

B は、それを現在日本人が使っている現代語（口語）に言い換えたものである。両者を比べてみると、古文と現代文との違いを知ることができる。

（2）歴史的仮名遣い

例文 A の上につけたカタカナは、現代仮名遣いによるものである。現代仮名遣いでは「いう」「使い」と書くところを、古文では「いふ」「使ひ」と書いてある。「ゐたり」のように、見慣れない仮名も見える。これは「歴史的仮名遣い」といわれるもので、平安時代の仮名遣いを基にしてできたきまりなのである。仮名が発明された当時は、「いふ」はイフ、「使ひ」はツカヒと発音されて、文字と発音と対応していたのだが、長い年月の間に発音のほうに変化してしまったのである。

仮名の種類

あいうえお	アイウエオ
かききけこ	カキクケコ
さしすせそ	サシスセソ
たちつてと	タチツテト
なにぬねの	ナニヌネノ
はひふへほ	ハヒフヘホ
まみむめも	マミムメモ
やいゆえよ	ヤイユエヨ
らりるれろ	ラリルレロ
わゐうゑを	ワヰウヱヲ

お馴染みの五十音図である。とくに、ヤ行とワ行に注意してもらいたい。ヤ行は「や ゆ よ」ではないし、ワ行は「わを」ではないのだ。現代仮名遣いでは、「ゐ」「ゑ」の仮名を使わないし、ワ行の「う」はア行の「う」と同じ、ヤ行とア行の

「い」「え」も同じということである。歴史的仮名遣いで使われる仮名は、現代仮名遣いで使われる仮名に、ワ行の「ゐ」「ゑ」を加えた四十八文字である。同じ仮名が二度出ないように工夫して作られた「いろは歌」に「ん」を加えた数である。左段は原文で、右段は意味を分かりやすくするために漢字を当て、濁点を加えたものである。

いろはにほへと　ちりぬるを	色は ^{には} 匂へど　散りぬるを
わかよたれそ　つねならむ	わが ^{たれ} 世誰ぞ　常ならむ
うゐのおくやま　けふこえて	^{うゑ} 有為の奥山 ^{けふ} 今日越えて
あさきゆめみし　ゑひもせす	浅き夢見じ ^ゑ 酔ひもせず

(3) 歴史的仮名遣いの読み方

①次の表の二十二字の仮名は、言葉によって書き分けられるが、その読み方は上下の関係に相互に共通する。

現代仮名 遣い仮名	ワ	イ	ウ	エ	オ	ジ	ズ	カ	ガ
古典仮名 遣い仮名		い		え	お	じ	ず	か	が
	わ	ゐ	う	ゑ	を	ぢ	づ	くわ	ぐわ
	は	ひ	ふ	へ	ほ				
					ふ				

〔注意〕

◆ 上の表のうちに、「は・ひ・ふ・へ・ほ」以外の仮名は、常に「イ・エ・オ・ジ・ズ・カ・ガ」と発音すればよい。

〔例〕おい(老い)、まゐる(参る)、きのえ(甲)、こゑ(声)、

おろか（愚か）、あを（青）、みじか（短か）、ふぢ（藤）、かず（数）、しづか（静か）、わか（和歌）、たいくわ（大火）、がいす（害す）、ぐわいこく（外国）

◆ 「は・ひ・ふ・へ・ほ」の仮名は語頭に来るときは、すべて「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」と発音する。

〔例〕はふ（這ふ）、ひる（昼）、ふうが（風雅）、へだたる（隔たる）、ほか（他）

◆ 「は・ひ・ふ・へ・ほ」の仮名は語間または語尾に来るときは、すべて「ワ・イ・ウ・エ・オ」と発音するのが原則である。

〔例〕かは（川・皮）、かひ（貝）、あやふし（危し）、うへ（上）、かほ（顔）

〔例外①〕次の場合の「ふ」は、「オ」と発音する。ただし、この場合の例は少ない。

たふる（倒る）、あふぐ（仰ぐ・扇ぐ。ただし、「オーグ」とも発音する。）、あふい（葵）

〔例外②〕「は・ひ・ふ・へ・ほ」の仮名は語間または語尾に来るときも、「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」と発音する場合がある。次の例がそれにあたる。ただし、「は・ひ・ふ・へ・ほ」の音を語頭に持つ言葉が、その上にくる語と複合した場合を除き、数は少ない。

はは（母）、はなはだ（甚だ）、かけひ（筧）、あふる（溢る）、おきへ（沖辺）、かきほ（垣穂）、まほし〔文語助動詞〕

②長音を表す場合の仮名遣いと、その読み方

これには、「ーう」と書くものと「ーふ」と書くものの二つがあり、以下の原則に従って発音する。

◆ ア列音＋「う」「ふ」……「オー」「コー」「ソー」など、オ列長音の発音になる。〔…au→…ō〕

〔例〕あうぎ (奥儀)、かうべ (頭)、さうし (草子)、たうげ (峠)、なう (脳)、はうき (箒)、まうす (申す)、やうやく (漸く)、まらうど (客人)、わう (王)、かふ (買ふ・飼ふ)、たづさふ (携ふ)、たふとぶ (尊ぶ)、おぎなふ (補ふ)、いはふ (祝ふ)、まふ (舞ふ)、さぶらふ (候ふ)

◆ イ列音+「う」「ふ」……「ユー」「キュー」「シュー」など、拗長音の発音になる。〔…iu→…yū〕

〔例〕いうなり (優なり)、久しう、にうわ (柔和)、ひうが (日向)、よりうど (寄人)、たいふ (太夫)、しふす (執す)、はにふ (埴生)、こんりふ (建立)

◆ ウ列音+「う」「ふ」……「クー」「スー」「ツー」など、ウ列の長音に発音する。

〔例〕くう (空)、つうじん (通人)、ふうが (風雅)、くう (食ふ)、すくふ (救ふ)、ゆふ (結ふ)、くるふ (狂ふ)、〔注〕植う「飢う」「据う」などは長音に発音しない。〔…uu→…ū〕

◆ エ列音+「う」「ふ」……「ヨー」「キョー」「ショー」など、拗長音の発音になる。〔eu→…yō〕

〔例〕えうなし (要なし)、けうらなり (清らなり)、せうと (兄人)、てうづ (手水)、でうり (条理)、へうびやく (表百)、べう (「べく」の音便)、めうおん (妙音)、れうり (料理)、まんえふ (万葉)、けふ (今日)、てふ (蝶)、ゑふ (酔ふ)

◆ オ列音+「う」「ふ」……オ列の長音に発音する。〔…ou→…ō〕

〔例〕こうち (小路)、おとうと (弟・妹)、ほうく (惚く)、おふす (負ふす)、よそふ (装ふ)、とふ (問う・訪ふ)、きのふ (昨日)、きほふ (競ふ)、あどもふ (率ふ)、まよふ (迷ふ)、うつろふ (移ろふ)、をふ (終ふ)

(4) 単語意味の違い

① 古典語と現代語と意味の異なる語

形が現代語と同じであるために、うっかりするととんでもない誤りを犯す元になる語である。その一例を挙げておく。

〔例〕遊び〔名〕	とくに、管弦（音楽）の遊び
急ぎ〔名〕	支度、準備
いたずら〔形動〕	むなしく無用、何もない
いつしか〔副〕	早くも、もう、できるだけ
おどろく〔動四〕	はっと気付く

① 現代語と紛れやすい語

形が似ているので、現代語の意味用法から類推して誤解しがちな語である。

〔例〕あたらし	惜しい、残念だ。平安時代以後、「新しい」の意にも使う
ありがたし	珍しい、生きにくい
おもしろし	すばらしい、興味が引かれる
いたし	はなはだしい、ひどい
こよなし	差が大きい、このうえない

(5) 文法の違い

① 文語では、主語を示す助詞を必ずしも必要としない。

〔例〕（古文）花咲く。→（現代文）花が咲く。

② 動詞は、文語・口語ともに、言い切りの形がウ段音になるが、文語には、イ段音の文字「り」で終止するラ行変格活用動詞「あり・をり・はべり・いまそがり」がある。

〔例〕月の都の人にて、父母あり。／（月の都の人であって、父母がいる。）

③ 口語では「ば」が仮定形にだけ接続したが、文語では未然形と已然形に接続し、その場合にはそれぞれ意味が異なる。

〔例〕雨降らば、行かず。／（雨が降れば、行かない。）

雨降れば、行かず。／（雨が降ったので、行かない。）